

踏まね踏まれても生き返る

NO.41 2025.12.28

ざっそう つうしん

いたばし雑草通信

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。

COM-MATCHAN

編集：発行 木村松夫
090-8646-9757

matsuokimura@gmail.com
com-matchan@hotmail.co.jp

板橋区立エコポリスセンター 「かんきょう観察員」登録
地域自主活動グループのWEBページでも閲覧できます。ほかのグループのレポートも見てください。

天変地変に一触即発の戦争危機 時代の流れを変える力はないけれど 2026年も言うべきことは言い続けていきたい

まちなかで見られるこの野草。繁殖力は旺盛でも背丈は低く、夏の暑い盛りに足元に咲いていたのが40年前に初めて見た時の印象でした。それが最近では一年中開花の植物に。2025年は冬間近になって大生長、わたしの腰のあたりまで背丈を伸ばしてきました。まるで別種の植物みたいです。

この「異変」、天変地変とは関係があっても、政治社会の大崩壊とは直接関係ないのですが、社会がこうもガタついてくると「エイヤ！ 異質で邪魔なものは取り除け！」と訴える風潮も出てきて、世の中ますます混沌。とても危険な時代になりました。

一方、コミュニティの基本単位である家族にも課題が多発。

わが木村家ではこの秋、孫の伝染性結膜炎や家族そろってのインフルエンザで学校休み。孫の見守りにいつもよりたくさん気を使って疲れたかと思うと、高齢化の問題にも直面し、ここのことろ遠出の外出を控えています。

果たして、春はやってくるのかしら？



巨大化した ハキダメギク キク科

☆年末に2点素晴らしい贈り物をいただきました☆

しのばず自然観察会 50年史 『私たちの上野公園』

私たちの上野公園

しのばず自然観察会 50年史



しのばず自然観察会

わたし（木村）が板橋区で自然観察・保護活動を始めたのは1986年、「いたばし自然観察会」と「板橋区の花ニリンソウを保存する会」でしたが、自然観察会は1979年に発足した都会での自然を守る活動でした。呼びかけ人の山下洵子さんが活動の手本としていたのが「しのばず自然観察会」で、「いたばし～～」よりも4年早い1975年にスタートしました。

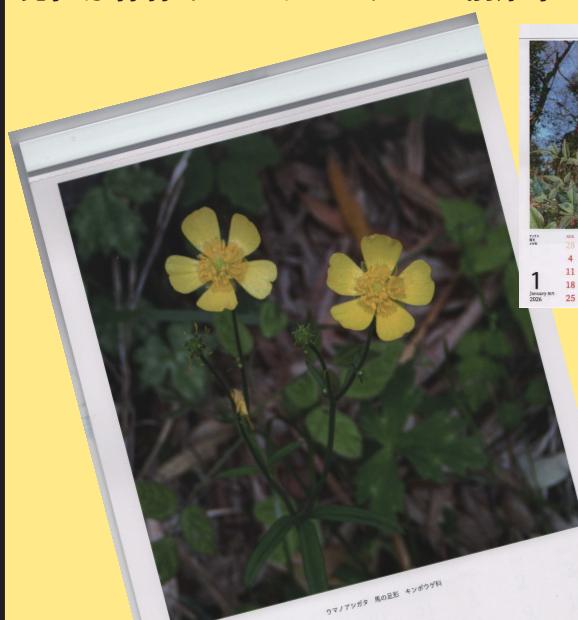
「いたばし～～」は1900年代の終わりに山下洵子さんが広島県で新設された大学に教授として迎えられ東京を離れたのを機に、活動は空洞化して停止状態になってしまいました。でも、先達団体の「しのばず～～」は21世紀に入っても日々と活動を続け、2025年で50周年を迎えました。それを区切りとして刊行されたのが本書です。

その内容は、第1章「上野とはどんなところか」から始まって第2章「上野公園の歴史と現状」という自然的・文化的な歴史の跡づけが全体の3分の1にわたって繰り広げられています。第3章からはじまる会の活動の振り返りは、定期的にしかも正確に行なわれてきた観察会・調査活動のほかに、活動テーマがものすごく多岐にわたっていましたこと、また、公園管理者である都の施策への自然保護の観点からの批判や提案も飽くことなく続けてきた軌跡が記録されています。この会が都会における自然保護活動の先駆けであり、現在もなお手本となる活動を継続していることがよく分かります。

自然観察会活動とは単に植物を見て歩く活動ではなくて、地域の歴史と文化を守り伝える社会活動なのだということを教えてくれる本書は**自然保護活動の教典**とも言えます。

それに比べてわたしの活動はいかに貧弱だったかと思い知らされました。

元赤塚公園サービスセンタースタッフ 現在は森林インストラクターで活躍中 杉本尚隆さんの2026年カレンダー



2026年カレンダー
撮影と制作：杉本尚隆



赤塚公園時代は最も気が合ったサービスセンターのスタッフでした。退職後のフィールド・奥多摩方面の植物を、季節ごとに紹介しているカレンダーです。

